



まつもと子ども留学基金

ニュースレター

第17号/2022年7月発行

2022年5月29日(日) 令和4年度定期総会を開催しました

2021年度のまつもと子ども留学基金の主な活動は、「リトリート」（日常を離れて疲れを癒す、転地療養）をテーマに、まつもと子ども寮に滞在してもらう形式の保養の受け入れと、冷え取りや身体の歪みを整えるお手当や操体法をお伝えする、快医学による手当て会「手当の茶の間@まつもと」を毎月開催しました。

この「お手当て」や「操体法」は、これまでもリトリートに来た親子たちの健康相談の際にお伝えしてきました。また、橋本俊彦理事は、毎月福島県を訪問して、健康相談会を開き、快医学講座を開催しています。（次ページに橋本理事の報告を掲載しています。）

「手当の茶の間@まつもと」は、子ども寮がある松本市内の方が主に参加されています。コロナ禍の中ではありましたが、日々の不調を家庭で整え、大切な家族を守っていく方法や、有事の際には身近な人とのつながりが大切なことなどをお伝えできたと思います。

また、今回はNPOが設立してから10回目という節目の総会であり、東京電力福島原発事故に伴う放射性物質による被ばくの後、甲状腺がんとなった若者6人が東京電力を訴えた「311子ども甲状腺裁判」の第1回口頭弁論が5月26日に開かれた直後の総会でした。

その「311子ども甲状腺裁判」の様子などもお聞きしながら、「まつもと子ども留学基金」の活動の柱として、保養（リトリート）、養生（セルフケア・手当講座）、留学（放射能から離れることがベスト）を存続させる意義を理事全員で確認いたしました。

7月には、松武秀樹代表と保養に来た子どもたちとの音楽ワークショップ、10月には橋本理事が企画する、快医学と保養をテーマにした震災フォーラムを、子ども留学も協力団体となり、四賀で開催する予定です。

『今後も、東日本大震災の被災地に暮らす皆さまの、多様化する悩みや不安な気持ちに寄り添い、活動して参ります。ご支援者の皆さまには、引き続き応援していただけますよう、どうぞよろしくお願いいたします。』（代表 松武秀樹）



畑の一角に、ビワの若木を植えました。成長が楽しみです。



「今の福島」

3,11 以前は福島県三春町で鍼灸治療室を営んでいましたが、震災後に家族が松本に避難したのをきっかけに活動拠点も松本に移しています。

この2年間、コロナ感染症のために保養などで福島を支援する団体や個人の多くは福島を訪ねる機会が激減しています。ある程度の情報は SNS などから得られますが、リアルな情報はなかなか知ることが難しくなっています。このような状況の中、まつもと子ども留学基金の情報拡散と健康相談のために毎月一回の福島訪問を継続しています。

現状では福島・松本間を貸切バスで移動するリトリート企画は難しくなっていますが、リトリートのニーズの聞き取り、これまでの参加者との関係をつないでいます。訪問エリアは 主に白河市、須賀川市、郡山市、二本松市、福島市など東北新幹線沿線の中通り地方です。

福島県南に在住のあるお母さんは、原発事故直後からご自分が住む地域で子育てグループを主宰しながら健康相談会の場を設けています。子育て、介護にと忙しい日々を過ごし、コロナ感染症の拡大以前はできるだけ子どもを保養に参加させていました。しかし、今でも周辺には保養に行ったことを口にできずにいる現実があると言います。

その一方で、保養の存在を知らない人がいます。郡山市の F さんは震災翌年に自己免疫疾患の診断を受けました。二人の娘さんは震災当時9歳と7歳。自営業のために日々忙しくされていて、保養情報は知らなかったとのこと。情報格差とわれわれの取り組みの力不足を実感しました。

現代人は日々抱えるストレスの中で、ゆっくりしたい、しばし日常を離れて静かな環境に身をおきたいと願っています。もちろん、放射線からもできるだけ離れたい。ただ、今の福島ではリトリートを呼びかけると復興の足手まといとして負のイメージに受け取られてしまう側面があります。

リトリートの本来の意味は、一定期間日常を離れ仕事や人間関係で疲れた心や身体を癒す過ごし方のことで、転地療法（療養）とも言い換えられます。まつもと子ども留学基金のリトリート事業を通して、環境的に安全なエリアで生活することは人としてあたりまえの権利であることを多くの人に知ってほしいし、松本の地に足を運んでいただきたいのです。

(理事 橋本 俊彦)



福島県での健康相談会や講座の様子



「まつもと子ども寮」の前に広がる草原が子どもたちに人気です。



人気のスポット
四賀化石館。



四季折々の里山の景色
に癒されます。



小学生も「よもぎ蒸し」に
トライ！好評です。

寄稿「山桜の咲く季節に想う」

山桜の咲く季節が一番好きです。新緑の山のあちらこちらにほんのりとピンク色の染まった山桜や純白の山桜が点々と見える風景は、子どもの頃の記憶を蘇らせます。とりわけ、30代から50代前半まで自然農を営み、子育てをして全国から研修生を毎年受け入れていた時に住んでいた川俣町のやまなみ農場に咲く樹齢50年の山桜が一番好きです。

毎年見てきたそのやまなみ農場の桜を見ることが出来なかった年が2011年です。記憶に一生残る最悪の出来事、東日本大震災と福島原発事故。2011年3月11日の夜中にやまなみ農場から当時13歳の次女と17歳の三男を車に乗せて、長女の住む福島市に避難をした車中で、「もしかしたら、川俣町には二度と戻って来られなくなるかもしれない」との思いが浮かびました。あの時の予感が的中し、あれから10年2ヶ月が過ぎ、未だに戻れないままです。

あの当時、私は、子どもたちを放射能から守る活動に駆け回る日々でした。山桜の咲いていたはずの4月21日、私は東京の参議院議員会館にいました。政府が4月19日に発表した年間被曝量20ミリシーベルト基準の撤回を求める院内集会へ福島県からたった一人で参加するためでした。「被曝から福島の子を守るために出来ることはなんでもやる。福島の悲劇を繰り返さないために、放射能を撒き散らす原発を二度と動かしてはならない」との想いを込めて、その年の春の彼岸のお墓参りで、「原発を止めるまでは二度とお墓参りには来ません」と亡き母の墓前で誓った私でしたから、無我夢中で上京しました。

あれから、福島の子供、孫を持つ親や祖父母たちやその支援者といった何人と直接お会いし、電話で話したり、メールでやりとりしたかわかりません。日本だけでなく、海外の多くの方とも繋がりました。生まれて初めて海外に行くことになったのも、3.11があったからです。

そうした中、福島から避難をされた多くの方が、避難先で新たな生活をスタートさせ、その地で子どもたちを守る活動を立ち上げた人たちもいました。その一つが、「まつもと子ども留学基金」でした。

松本市で「まつもと子ども留学基金」を立ち上げることができたのは、勿論、多くの支援者があってのことですが、当時松本市長だった菅谷昭さんのお力添えも大きかったと思います。

2011年10月、菅谷昭さんを講師として福島市にお招きしました。講演が始まる前に楽屋に挨拶に行った私に、菅谷さんは一言「佐藤さん、どこまでお話してもいいですか?」と言われました。その言葉を聞いて「福島はチェルノブイリと同じになったんだ」と直感「全部話して下さい。もし、隠したら政府主催の講演会と同じになりますから」と答えました。講演内容を聞いて分かりました。菅谷さんは、お母さんたちのショックを気遣ってくれたのでした。福島市は菅谷さんが甲状腺がん手術をしてきたベラルーシ共和国のミンスクと同等の汚染が広がっていたからです。

まつもと子ども留学で過ごした子どもたちも、卒業後それぞれの道へ進んでいると思います。小中学生時代に経験したことはその後の人生に大きく関わることとなります。私自身のことを振り返っても今の活動や、仕事の基盤はその頃の経験があったからです。しかも、楽しい経験だけでなく、と言うより辛く悲しい経験が今の私の活力のバネになっていることは間違いありません。「人は、流した涙の数だけ強くなれるし人には優しくなれる」そう信じて生きて来ました。だからといって原発事故を無かったことのようにするわけにはいきませんし、これからも起こしてはいけません。

福島では、来年春に原発から出ている汚染水を海に流すとの政府決定に、更なる苦難が襲いかかります。海に放射性物質を含む汚染水を流すなどとんでもないことです。海は世界に繋がっています。しかも、人間だけの物ではありません。海に住む生物全てに被害が及びます。「平常稼働時でも流しているから問題ない。薄めて流すから問題ない。沿岸から1km先から流すから問題ない」と説明していますが、放射性物質を出し続けることが問題です。それを、無くさない限り、母なる地球は人間の強欲のために、生物の住めない場所になることに、気がついて欲しいものです。

震災から10年が経過し、コロナ禍の中で、数年前から福島で活動を始めた「子ども食堂」と今年から始めた「多世代交流フリースクール」で今年の春は大忙しです。2011年春と同じくやまなみ農場の山桜を見ることが出来ませんでした。しかし、今年は、希望に溢れる春ですから、悔いはありません。子ども食堂も、フリースクールもその先に見ているのは、子どもたちの「保養」に繋げることが目的です。菅谷さんのお話を聞いたときから福島の子供たちには数十年に及ぶ「保養」が必要だと思っています。直ぐには「保養」に出かけることが出来ない子どもたちが多くいますが、その親との信頼関係を構築していく中で、保養に出かけるきっかけを作って行きたいと考えていて、まつもと子ども留学へも必ず、福島の子供たちを連れて行きたいと思っています。(子どもたちの命を守る会・ふくしま 佐藤幸子)



幸子さん
福島市飯野町花立にて

令和3年度 会計報告

前年度繰越 12,194,772 円

令和3年度経常収益 1,281,027 円

経常費用

留学事業費(人件費・施設維持) 4,324,278 円

体験活動費(保養など) 410,703 円

里山保全・管理費 391,531 円

経常費用計 5,126,512 円

令和4年度へ繰越し 8,349,287 円

※詳細な費目はホームページにて公開しています。

<http://www.kodomoryugaku-matsumoto.net>



まつもと子ども留学基金は 2013 年に信州松本で「子ども留学プロジェクト」を立ち上げ、2014 年 4 月から「まつもと子ども寮」を開き、被災地の小中学生の留学を受け入れてきました。

2020 年 3 月までに、留学していた全員が卒業しました。同時期に始まった感染症の拡大の影響を鑑み、現在は「リトリート(転地療養)」型の保養の受け入れを中心に被災者の支援を続けています。被ばくの危険のない安全な環境で、健康にリスクを負う不安を持たず学び・遊び・生活できこそ真にリラックスすることができ、その権利が当然保証されるべきですが、原発事故後の被災地では、その権利が侵害されていると言わざるを得ない状況が続いています。

そして現在も被災地では、子どもたちが制約の多い暮らしを余儀なくされています。まつもと子ども留学基金のみならず、保養を担ってきた団体も国や県などからの公的な支援は受けられずに活動を続けてきました。保養や、留学する子どもたちの負担をできるだけ少なくするため、市民の皆さまからのご寄付によって、人件費、施設の維持費、保養の費用などの運営のための資金をまかっています。皆さまのご支援に心より感謝申し上げますとともに、今後とも、皆さまのご理解とご協力を心からお願い申し上げます。



◆Instagramは「matsumoto.relief」で検索フォローを
よろしくお願ひいたします。

リトリート、手当て会、畑の様子をお知らせしています。

編集後記

◇4 月早々に福島へ行き、佐藤幸子さんお会いして寄稿をお願いしたのですが、すっかり山桜の季節が過ぎ去ってからの発行になってしまいました。

幸子さんが活動する「子どもたちの命を守る会・ふくしま」はコチラ⇒<http://kodomo-fukushima.com/index.html>
◇昨年は夏休みに入ってから、感染症の規制が出て、8 月中旬からキャンセルが相次いだリトリートでしたが、今年の夏休みこそは信州でのんびりしてもらいたいです。

日々の忙しい生活から離れ、家族との時間を大切に、リラックスすることで疲れを癒していただけるようお手伝いしています。被災地を往復する交通費の補助などを、皆さまからのご寄付により支援しています。心より感謝申し上げます。

【発行】NPO法人まつもと子ども留学基金

事務所：〒390-0861
長野県松本市蟻ヶ崎 1-3-7
(安藤法律事務所内)

TEL：080-4716-2011
FAX：0263-39-0700
MAIL：matsumoto.relief@gmail.com

ご支援はこちらから。
どうぞよろしくお願ひいたします。

銀行振り込み

●ゆうちょ銀行(郵便振替・口座間送金)

記号 00590-5-101451
口座名 まつもと子ども留学基金

●みずほ銀行

店名 松本支店
口座番号 普通預金 1265273
口座名 まつもと子ども留学基金

振込手数料はご負担くださるようお願いいたします。

自動送金サービス

●ゆうちょ銀行

記号 11100
口座番号 普通預金 6428711
口座名 まつもと子ども留学基金

●みずほ銀行

店名 松本支店
口座番号 普通預金 1265273
口座名 まつもと子ども留学基金

お手続きは銀行窓口にてお願ひいたします。

つながる募金

スマホをQRコードにかざすだけで100円から寄付ができます。

docomo au

SoftBank

